

新

歌人群像

福田栄一

● 思索的抒情と和歌回帰

● 大滝貞一 ●



「短歌を捨てる」宣言

福田栄一（かくだえいいち）は一九四六（昭和二十一年）十月に、みずから「古今」を創刊して、その文学的主張に「思索的抒情」を掲げる。当時、氣鋭の青年歌人たちの多くが、その膝下に集まり、活気に満ちた作歌活動を展開すると同時に、結社の旗標としての文学的主張の意味づけを真剣に論じていた。

「私は、〃人間〃、〃現実〃、〃社会〃、〃肉体〃、〃近代〃などを連ねてゆく主體的なるわれわれの内面的な生き方を、更に別な言葉で、〃思索的〃と呼んでゐた。〃戦後〃の人間の内部形成、つまり描かうとする人間像の方法自体を、〃思索的〃であると考へてゐる。さういう思索的なる人間像の造型（象徴的表現）を、私は仮に「思索的抒情」と呼びたいと考へてゐる」と、福田自身が提言してゆく。

つまり、思索は単に思弁的限定的な意味ではなく、人間の内部が行う行為そのものを指し、生きている考えを示すことであつた。そしてその内部は外部を知覚する視覚・聴覚・触覚などを同時に働かせ、人間の感覚の交響の中から、複合的な美をつかむことである、としたのである。その福田の理論が具体的な

作品として実証されるはずであったのが、歌集『地の霧』（一九五九〈昭和三十四〉年・長谷川書房）である。一九四七〜五四（昭和二十二〜二十九）年に至る期間の戦後作品三六二首を収録したもの。その歌集の組み方は、次のような特異なものであった。

ひと房の葡萄を持ってば

君が手に

流るる如く秋の紫

くれなるのつぼみはひらき

あはあはとなりゆくまでの

山の海棠

流氓の思ひを持ってば

黄に照れる

山みな流れある如く見ゆ

石川啄木の『二握の砂』、釈道空の『春のことぶれ』、自分自身の『冬艶曲』などの表記法を念頭に置いて試みたとする、視覚的構成と気息的音韻改行法とでもいえるほどの、一首一首がみな異なる組み方であった。しかし、この歌集は校正が終わり、「古今」誌上で予約募集の広告まで載つたにもかかわらず、そのまま放擲されて、ついに未刊になっ

てしまった。何か事情が重なったのであろう。福田の三十七歳から四十四歳に至る、いわば脂の乗りきった活動期の作品であり、戦後の再出発の烽火を意味する歌集であっただけに、痛恨な挫折感と無念さを残すことになった。結果として、この『地の霧』作品の大部分は、第四歌集『きさらぎやよひ』（一九六八〈昭和四十三〉年五月・短歌新聞社）に収録されるまで、見放されてゆく。『きさらぎやよひ』に再収録したのを見届けて、そのゲラ刷りは私、大滝に資料として託され残った。さて『きさらぎやよひ』は、一〇九七首に及ぶ作品を集めた大冊である。

シベリアの風がのりくるひわ色の砂丘

も淋し低き津軽野

たましひになりてもかかる淋しさか水

に流れて眠る白鳥

病むわれの胸のフィルムに写りゐて哀

切の霧いつ呑みてゐし

王朝のなげける女あはれにて嘆きとど

めぬこまつなぎの花

そして自序に書かれた次の短い文章が、歌壇をして震撼せしめるのである。「私はこの歌集を出して、短歌を捨て去りたいと思っている。私は『和歌』の本来にかえって、あわ

れを、ものあわれを思いとして、心の基質として、私のいのちのものをうたいたいと思う。そして、私の今の現実・思想を表現してゆきたいと思う」と。この「短歌を捨て去る」という言葉のみが、極端にクローズアップされて、活躍中の有力歌人の発言だけに騒然となったのである。しかし冷静に見れば、和歌本来の「ものあわれ」の精神に立ちかえる、原点復帰への宣言であった。それにしても、大事な戦後歌集を未刊にしたり、その作品の再録歌集で、歌壇を雷霆の稲妻のように射抜くなど、何とも人騒がせな歌集だった。



1955年ごろの日本歌人クラブの幹事。
前列左から2人目が福田栄一

福田栄一

二十一歳で歌壇デビュー

福田栄一は、一九〇九（明治四十二）年四月三十日、東京・京橋に父春吉、母ふくの次男として生まれた。家は代々にわたり御用商の油問屋で、神田三川丁で河内屋・福田伝兵衛を世襲したが、父の代より菓子商の夏月堂となっていた。十三歳で東京府立第一商業学校に入学、神伝流水泳を習う。翌年の関東大震災に遭い、守谷武文を知り短歌を作り始める。また、予楽院の書道を学ぶ。十五歳で小泉芝三に師事し「ポトナム」に参加。十八歳、商業学校を卒業し「ポトナム」同人となる。この頃、肺結核を罹病、生涯の病いとなる。

1964年、自宅での福田夫妻



る。十九歳で東洋大学東洋哲学科に入学したが、ほとんど出席できず、信州、伊豆などで静養する。一九三〇（昭和五）年、二十一歳で鹿児島県士族牧元助八、ハマの長女タノ（たの子）と結婚し、同年九月に第一歌集『冬艶曲』（ポトナム社）を上梓した。早熟な出発である。

牛と交はる女の御像や遠の世の仏師の
心かなしめりけむ

山頂の樹洩れの日射さむかりき遠くは
ゆかず鳥もひそめり

山の高さに揺りて呉ると云ふ児等と鞆
鞭にのりゐて日が暮れにけり

十代後半から二十代に入ったばかりの作品を引つ提げて登場した作者の新鮮な作風に対し、歌壇は鬼才の名を冠して称賛する。病氣静養期間に耽読した書籍、演劇・美術などの造詣も加わって、燦然たる美感と柔和な抒情質を提示したゆえにである。福田はその後、一九四〇（昭和十五）年に新鋭歌人を集めた合同歌集『新風十人』（八雲書林）にも加わり、一九四三（昭和十八）年に第二歌集『時間』（興亜書院）を、一九四八（昭和二十三）年には第三歌集『この花に及かず』（洗心書林）を刊行している。その『時間』と『この

花に及かず』の中からも秀歌を抽出する。

すぎし日のきのふも今日もかなしみて
われは田螺になりたく思ひぬ

天なかにまぎれむとするたんぼぼの実
を追ひてゐぬ美しきこと

いきどほりしづめしわれのむらぎもに
くれなるの落葉いち枚残る

蟻ひとつわが足もとに歩みきてゆくへ
を索めまたゆきにけり

ひさかたのそらいろの実がこぼれをり
龍のひげの花はいつ咲きたらむ

涙こらへてこのしづかさもまもるなる
糸のころ草のをさな穂の風

両歌集から三首ずつ採った。『時間』は福田の二十六歳から三十二歳までの時期の作品で、時代的には日中事変から第二次世界大戦開始までの、いわば国を挙げて戦争に傾斜してゆく時期。『この花に及かず』は三十四歳から三十六歳に至る、大戦只中の出版社解散や雑誌統合令に従い「アララギ」と合併する期間で、終戦直後の食糧不足で買い出しを余儀なくされる時期の作。いずれも暗黒と貧窮の世相に耐えつつも、純粹美としての抒情質を失うまいとする、まさに人間味のこもった

作品である。哀感のこもった感性が滲む。

命をこめた美の終焉

福田が身体の不調を訴えて、西荻中央病院での診療の結果、病状最悪が告げられ、清瀬の国立療養所東京病院の重症病棟に入院したのは、一九七二（昭和四十七）年九月であった。三年間に及ぶ療養生活を送り、胸部疾患が治癒したものの、食道癌が発見されるという状況下で続けられたのが、第六歌集『みなづきふづき』（一九七四〈昭和四十九〉年十一月・短歌新聞社）である。



福田栄一最後の写真。1974年12月、東京女子医大で、見舞いに訪れた筆者と

山茶花の七重の色の散るばかり老いて

こころの悔しきばかり

みづひきの閑けさつづる今朝の花いの

ちつながむことの寂しき

かまきりの幼きみどりはかなげに咲く

昼顔の花にとまりぬ

帰れずに亡骸となり帰さるる扉口があ

りて人出入せず

えこの花夕くらがりに散りやまずわれ

に寂しき来迎引接

入院生活はまさに命の極点を見つめた必死の抗争である。入院直前のある講演会の中で、「美」とは人の心のたえずまいにあるのだとして、「人が命をこめて見たものが美である」と説いたが、文字通りこれらの作品にこめられた美は、なまなかのものではなく、いよいよ澄明静寂な境地をひらいている。そして先に宣言した文学姿勢に触れて、「あとがき」の中で「私は『和歌に帰ろう』と考え初めてから、妙に心が迷わなくなった。反抗的、攻撃的、否定的であった自分の心が、だんだん同感的になり、包括的になり、自然的になっているのがついた。これでは歌論（文学論）ではなく、人生観になってしまふ、そうも考えた。しかし、それこそ、それでいいのだと思った」と書いている。清雅で深い悟入

の境地とってよいのであろう。

さて、食道癌が発見されて、コバルト照射を受けてきた福田は、癌が悪化し飲食不可能になり、東京女子医大病院に転院する。食道バイパス手術、肺炎併発などを経て、一九七五（昭和五十）年二月九日、六十五歳を一期として逝去した。『みなづきふづき』以降の作品一三七首が残された。最後の最後まで作歌に執着した生涯であった。第七歌集に当たった遺歌集として『ひとりあそび』（短歌新聞社）が同年十月に刊行された。

夕のいろはつかに残る雲流れ夕のくら
がり地より立ちぬ

悲しみの眼に似て深き藍の色桐壺の花

咲けばこぼるる

散りつくしもう落葉なき陰庭の土見て

をりぬこの世のものを

眺める姿勢の極点として研ぎ澄まされた作者の静思が、自然界の中からすべての有色を消し去った無色無碍の世界として、陰庭の土の上に見ている。壮絶なまでに日本の美を探り続けた作者の「末期の眼」に刻まれた「この世のもの」であった。

福田の墓は、豊島区の雑司ヶ谷霊園内にあ
る。（おおたき・ていいち「雲珠」主宰）